

大沼法竜著

宗祖七百回忌記念

親
ど
ろ

敬
行
寺
発
行

はしがき

意義ある人生の才一步はオギアーに始まつたので決して天上天下唯我独尊なんて身の程を覚えない事を言つたのではなかつた。

二葉は早天に遇えば眩暈をするだろう、豪雨に遇えば根を頭わすだろう、地震に逢つては埋没し、吹雪に逢つては凍死するに違いない、大風には飛び虫の為めには生を絶つたらう。小学校の二葉は学齡に達して開いたけれども、幾度も倒れようとし幾度も曲ろうとして居た。漸く中学時代の幹は太り枝の繁る時には多くの友達は実業に就き、進学する者は十指を屈する程も無かつた。更らに大学の果実を結ぶ其の時には竹馬の友は後を絶つて居た。

回顧すれば二十有一年、(尋常四年、高等四年、中学五年、予科二年、本科三年、研究科三年) 曲り易い小学時代、誘惑され易い中学時代、放蕩し易い大学時代を眼に

見えな^い誠^{まこと}の信念^{しんねん}で私^{わたし}の心^{こころ}を操^{あつ}つ、曲^{まが}りなりでも卒業^{そつぎょう}さして下^{くだ}さる迄^{まで}の母上^{ははうえ}の辛酸^{しんさん}はどれ程^{ほど}であつたであらうか、何等^{なんら}の背景^{はいけい}も無く、物質^{ぶつしつ}の補助^{ほじょ}も無く、女^{おんな}の瘦腕^{やせうで}で一人の僧侶^{そうりよ}を造^{つく}り上げようとす苦^く心^{しん}はどれ程^{ほど}であつたらうか。

散乱^{さんらん}し易^{やす}い私^{わたし}の心^{こころ}を弘誓^{くわいぜい}の仏地^{ぶつち}に樹^たてさせ給^{たま}ひ、瞋恚^{しんに}の早天^{かんてん}には法雨^{ほうう}を注^{そそ}ぎ、貪慾^{とんよく}の豪雨^{ごうう}には自^{みづ}から喜捨^{きしや}をして模範^{もはん}を示^{しめ}し、誘惑^{ゆうわく}の風荒^{かぜすさ}ぶ夕^{ゆうべ}には慈悲^{じひ}忍辱^{にんにく}の添木^{そえぎ}をして風^{かぜ}を遮^さぎ、酒食^{しゆしよく}の害虫^{がいちゆう}驅除^{くじよ}には百^{ひゃく}の言^{げん}を竭^{つく}すよりも身^みの行^{おこな}いを以^{もつ}て示^{しめ}すに如^{ごと}かずと自^{みづ}から示^{しめ}し、或^{ある}は誠^{まこと}めては汝^{なんじ}は僧侶^{そうりよ}と云^いうみ仏様^{ほとけさま}の代官^{だいかん}を務^{つと}める者^{もの}ではないか、自分^{じぶん}を正^{ただ}しく歩^{あゆ}まし得^えない者^{もの}がどうして人^{ひと}を導^{みちび}く事^{こと}が出来^{でき}ようか、覚^さめよ、進^{すす}めよ、真^{まこと}の道^{みち}へ!! 涙^{なみだ}と共に鞭^{むちう}打^{うち}つて下^{くだ}さつた事^{こと}は今猶^{いまな}お忘れ^{わす}れられない。

意馬^{いば}心猿^{しんえん}の私^{わたし}の心^{こころ}は東奔^{とうほん}西走^{せいそう}して止^{とど}まる処^{ところ}を知ら^しない、障壁^{しょうへき}に打^{うち}当^{あた}つては嘶^{いな}き不平^{ふへい}に満^みちては蹴^けり飛^とばす、この轡^{くつわ}の無^ない馬^{うま}の手繩^{たづな}となつて御^ごして下^{くだ}さつたのは母上^{ははうえ}の愛^{あい}情^{じよう}である。幾度^{いくたひ}かの家庭^{かてい}の変動^{へんどう}にも自^{みづ}から投^{とう}じて私^{わたし}を護^{まも}り、降^ふり積^{つも}る人生^{じんせ}苦痛^{くつう}の雪^{ゆき}を

遮まざる菰こもとなり、

一日いちじつも早く開ひらけよ梅うめの花はな

いやが上うへにも香かり高たかかれ

と、待まち詫わび給たまう母上ははうえの心こころを思おもい、注そぎ給たまう母上ははうえの熱ねつ涙なみだを思おもう時とき、どうして感かん謝しゃせ
ずいに居おられよう。只ただ只ただ合あ掌がつしやうして鴻こう恩おんに報むくゆる為ために自じ分ぶんの使し命めいを果はたさずには居おられな
いのである。